

大学生の主観的生活満足度と自己認知・人間関係・成績

—東海大学文学部 1 年生を対象にして—

小川恒夫・園田由紀子

The Factor Analysis of University Student's Subjective Life Satisfaction : For First Graders of School of Literature at Tokai University

OGAWA Tsuneo and SONODA Yukiko

Abstract

This study reports on the survey about the life satisfaction for university students half a year after admission. The purpose of this report is to obtain clues on university student's life satisfaction from 4 factors (learning motivation, social capital, metacognition, grade). As a result of regression analysis, the student's life satisfaction at this time was greatly affected by human relations, grades and the "Joy of learning" in learning motive. But for students from the general entrance examination, Metacognition was very important factor also.

1. 問題意識

本稿では、2016 年度入学の東海大学文学部 1 年生を対象にして、初年度春学期が終了し夏休みが明けて秋学期が開始された 1 週目(9 月下旬)の時点における大学生生活満足度を測定し、同値を規定する要因を考察することを目的とする。

調査を実施した大学 1 年生の秋学期開始時期は、新しい環境にも慣れながら、専門科目への導入科目も増え始める時期である。文部科学省が実施している 2016 年調査報告「学生の中途退学や休学等の状況について」に示されている大学生の退学理由状況をみると、経済的な理由以外にも学生自身の学業、学習への意欲喚起や人間関係を含めた学校生活への不適応などが原因で退学に至るケースも多く、この時期の大学生生活満足度を規定する要因の検討は重要である。先行研究では、大学生生活不満足群は、精神的だけでなく身体的不調を訴える割合が大学生生活満足群よりも有意に得点が高いことが報告されている(武蔵、2012)。

大学生の生活満足度に関する先行研究では、岩田(2015)は 2010 年 9 月に日本の 26 大学(国公立 6 校、私立共学 18 校、私立女子校 2 校)の 2831 名の大学生を対象に「大学生の生活

満足度」調査を行い、規定要因の検討を行っている。参加者の年齢構成では、本調査と同じ入学初年度に近い18歳～19歳が全体の45.4%となっているため、本調査は、基本的にこの調査の結果をベースにして、東海大学文学部1年生との比較検討を行う。岩田調査の結果によると、大学生生活満足度の高さを規定する要因として有意差($P<0.01$)が確認された偏回帰係数(B値)の大きい項目は、①家計的余裕(.158)、②将来の自分についての不安(.150)、③居住地域への満足(.115)、④交際相手の有無(.115)、⑤家族との関係(.107)、⑥趣味・スポーツ活動の充実(.075)、⑦第一志望大学(.075)、⑧親友・親しい友人数(.058)、⑨自己の特技・才能認識(.053)、という順になっている。この調査結果からは、生活環境要因や人間関係要因、娯楽活動要因、自己能力認識(自己効力認知)要因などが大学生生活満足度に関連していることが分かる。

本調査の実施環境として、授業前の自由時間内という調査時間から項目数が限定されたため、大学生として自力での変動性が低い経済的余裕などの「生活環境要因」を外し、残りの「人間関係要因」「娯乐的要因」「自己能力認知要因」を中心に測定することにした。また、岩田の調査では、学業成績や学習動機の有り方(程度・種類)といった大学生の本業への取り組み態度・結果を独立した影響項目として設定していないため、本調査では上記に加え「前期成績満足度」を調査項目として設定した。さらに、どのような「学習動機」が「前期成績満足度」「大学生生活満足度」に影響しているかを合わせて検討した。

大学進学を機に、親元を離れて一人暮らしを始める学生も多く、生活環境も大きく変わることから孤立感や孤独感などにつながりやすい、入学後の「人間関係」や「自己認知」要因が、大学での学習状態や生活満足度に大きな影響を与える要因であることは想定しやすい。本稿では、岩田の設定する大学生生活におけるスポーツや趣味活動などの要因も単なる気晴らしではなく、最終的には上記の人間関係や、自己認知の確認向上に繋がる項目と考え、本調査では、入学半年後の東海大学文学部1年生の生活満足度を以下の4要因、①自己認知の状態、②学習動機の状態、③人間関係の状態、④前期学業成績の状態、から測定することとした。

2. 目的

生徒・学生の「自己認知」、「学習動機」および行動結果としての「人間関係」「前期学業成績」の安定性が、感情としての「大学生生活満足度」にどのように関係しているかについて、先行研究では以下のような指摘がなされている。

メタ認知は、「客観的な自己」「もうひとりの自分」などと形容されるように、現在進行中の自分の思考や行動そのものを対象化して認識することにより、自分自身の認知行動を把握することができる能力であるが、近年のメタ認知研究においては、自己効力感との関係性が注目され(Goursey,2001)、学習者は、学習結果を評価するモニタリングや、学習目標を設定するコントロールといったメタ認知的行動を行うことで学習を自己制御できていると感じて自己効力感を高め、そのことがまたメタ認知を促進し、学習過程がより自己制御的になりやすいことが明らかにされている(Ellis and Zimmerman,2001: 藤田、2010)。このようにして形成される

自己効力感の高さは、生活満足度と相関が高いことも指摘されている (Greenspoon & Saklofske, 2001)。

さらに、メタ認知力の形成は、自ら学び続けられる力 (アクティブ・ラーニング) を通じて、生徒・学生の学習動機の向上とも相関があるという実証研究も多く示されている (長坂、2012 ; 下鳥ほか、2014)。従来の先行研究では、(1) 学習自体が楽しい「充実志向」、(2) 知力をきたえるための「訓練志向」、(3) 仕事や生活に生かす「実用志向」、などの「充実志向」と呼ばれる内発的学習動機だけが、学業成績を予測すると考えられてきたが、近年は「メタ認知力」を媒介に、(4) 友達につられての「関係志向」、(5) プライドや競争心による「自尊志向」、(6) 報酬を得る手段とする「報酬志向」などの外発的な要因であっても、学習を行う価値を認め自分のものとして受け入れている状態を示す「同一化調整」を行った動機の方が、長期的には安定した学業達成とのポジティブな関連性を維持できることが示されている (西村ほか、2011)。また、学習に対する興味や楽しさに基づく従来の内発的動機に相当する「内的調整」は、学業成績を介さずに Well-Being や精神的健康に直接の影響をもたらすが、「同一化調整」外的動機は学業成績を媒介にして精神的健康を予測することが明らかにされている (Burton & Lydon, 2006)。つまり、メタ認知を媒介にした学習は、偏った領域での内容理解への特化ではなく、総合的なバランス感覚を持った学習を可能にするとする指摘 (Koestner & Losier, 2002) が近年証明されつつある。

また、「メタ認知力」は人間関係形成においても重要な概念であることが示されている。本調査では、人間関係をソーシャル・キャピタル (人間関係資本) として捉えているが、ソーシャル・キャピタルとは、同じコミュニティにおける他者との関わりを「相互信頼・互酬性・規範」として概念化し、それを社会的な資本に例えた概念である (Putnam, 2000 (邦訳) 柴内ほか 2006)。人間関係形成とメタ認知との関係について、三宮は以下のようにコメントしている。「現在の日本において解決すべきコミュニケーションの問題は、自分の考えや気持ちをうまく伝えられないことである。そのために、(1) 優れた意見であっても相手に伝わりにくく受け入れられなかったり、共同思考に貢献できなかったりする、(2) 気持ちが十分に伝わらず、信頼感のある共感的な関係が築きにくい、といった結果を招いている。考えや気持ちを効果的に伝えるためには、コミュニケーションに関わる自己の認知や感情を対象化してとらえること、すなわち、コミュニケーションに対するメタ認知が重要である」 (三宮、2004)。そして、このようにして形成されてくる人間関係は、「仲間と励ましあう」、「受講している授業のクラスメートと情報を教え合う」「教員への相談をする」などのネットワークを介し仲間やクラスメート、教員の資源を利用することで、学習動機形成だけでなく、精神的健康度を向上させて生活満足度を高めていることが指摘されている (三宮、2008 ; 露口、2016)。但し、この人間関係資源が、近隣地域間や学校内で蓄積されていたとしても、それらを認知し享受するには個人の主観性が大きく影響することから、本調査では、その利用可能性を個人がどのように捉えているかに注目した「主観的ソーシャル・キャピタル (人間関係)」尺度を使用した (高倉ほか、2012 ; 芳賀ほか、2016)。

3. 方 法

調査の概要

本調査は2016年9月24日開催の文学部現代文明論2の初回ガンダンス終了時に、文学部長許可の下、初回ガンダンスに出席した949名の1年生を対象に質問紙調査法によって行われ、調査に協力する意思を持った学生のみ調査を行った。うち有効回答数は829名であった。調査はガイダンスの終了後に行い、実施時間が15分間と制限されたため、既存の各測定尺度から抽出した全50問の質問項目によって実施された。本調査では、学生の生活満足度に影響を与える要因の探求的調査としての意味合いも含んでおり、限られた時間で実施する調査内で多くの要因との関連を見ることを優先したため、本稿での測定値は今後実施される本調査に向けた参考値として位置付けられるものである。調査項目については、東海大学研究倫理委員会の承認を得た。

尺度の構成

(1) メタ認知

「成人を対象とする新しいメタ認知尺度」(吉野・懸田・宮崎・浅村、2008)から、因子負荷量が0.5以上のものを抜粋して「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の7件法で測定した。質問項目は①「自分にどんな知識があるか、何ができるか、自信を持っていえる」②「できる・正解だと思っていたことができなかつたことがある」③「他の人に比べて得意なところ、苦手なところを具体的に説明できる」(以上:認知特性)④「自分に最適な勉強方法を知っている」⑤「レポート・テストで良い結果を得るための方法を知っている」(以上:メタ認知的方略)⑥「自分の将来の目標のため、現在計画的に努力していることがある」⑦「とりあえず・何かするより計画を立てて取り組む方が好きである」⑧「目標に向けて建てた計画が予定通り進まなくとも修正することができる」(以上:メタ認知的調整)⑨「返却されたレポート・テスト成績の結果を分析し、次に生かすことができる」⑩「思いのほか悪い結果がでたとき、冷静に受け止め、反省できる」の10項目である。

(2) 人間関係

「青少年の学校や近隣におけるソーシャル・キャピタル尺度」(高倉ほか、2012)から測定した。大学入学後半年が経過した時点においても、東海大学では一人暮らしを始めた学生も多く、近隣地域間でのソーシャル・キャピタルへの認知には個人差が大きいと考えられる。したがって、本調査では、居住地近隣におけるコミュニティー形成状態を聞く項目は集計から除き(「現在住まいの近隣で助け合いのコミュニティーができています」「近所の人と顔を合わせれば挨拶する」)、学生間・教員間、一般的他者との相互信頼、互酬性、規範から形成される主観的ネットワーク意識としての人間関係が、生活満足度に与える影響を考察することにした。質問項目は、①「大学入学後に信頼できる友人ができた」②「大学入学以前からの友人との信頼関係が続いている」③「大学にいるときは授業を含め特定の友人と一緒にいることが多い」④「大

学入学後頼りになる先輩、先生ができた」⑤「周囲の人に対して困ったときはお互い様という気持ちがある」⑥「知らない人であっても、困った人を見かけると助けてあげたい」⑦「ゴミの分別やごみ出しの時間はきちんと守るようにしている」⑧「夜間の騒音等、近所に迷惑をかけないように気をつけている」の8項目を「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の7件法で設問した。

(3) 学習動機

学習動機は、学習動機の2要因モデル(市川、1995)を参考とした。このモデルは、大学入学直後の大学生に実施された調査結果から導き出されたもので、これらを用いた実践研究も多い(平山 2001 など)。このモデルでは36項目質問で構成されているが、本研究は調査時間が制限され回答負担を軽減するために、各下位尺度項目から因子負荷量が0.5以上のものを抜粋して7件法、以下の20項目で設問した。①「新しいことを学びたいという気持ちが強い」②「いろいろな知識を持った人になりたい」③「すぐに役に立たなくとも勉強がわかること自体が面白い」④「勉強することで頭がよくなる、頭の訓練になると思う」⑤「わからないこと、知らないことがわかるようになりたい」⑥「合理的、論理的な考え方ができるようになるためには勉強が必要だ」⑦「勉強するといろいろな面から多面的に物事を考えられるようになる」⑧「将来の仕事や生活に生かしたい」⑨「学んだ知識はいずれ仕事や生活で役にたつと思う」⑩「知識や技能を使う喜びを味わいたいから」⑪「みんなが勉強しているので自分もやらなければならないと思う」⑫「親や好きな先生に認めてもらいたいから」⑬「周りにいる友人と同じように勉強したい」⑭「成績がいいと他の人より優れているような気分になれるから」⑮「勉強ができる人、良い学校を出る人は立派な人と尊敬されるから」⑯「勉強が人並みにできないと、自信を持ってないから」⑰「テストや成績がいいと先生や親に褒められるから」⑱「将来、経済的によい生活をしていくために勉強する」⑲「社会に出てから優遇されるようになるために勉強する」⑳「しっかり勉強していないと将来良い仕事に就けないから」

(4) 大学生生活満足度および前期成績満足度

「大学生生活満足度」および「前期学業成績満足度」は、「大変満足」から「まったく満足できない」の5件法で測定した。

(5) 参加者と手続き

全項目へ明確な回答があった調査参加者属性は、男性418名・女性411名。入試形態としては付属生286名・推薦入試生213名(AO入試・公募制推薦・指定校推薦)・一般入試生329名(センター前後期・一般入試AB)。この時点のサークル・クラブ加盟割合は、体育会65名、その他一般サークル・クラブ(同好会・文化会・学生会・チャレンジセンタープロジェクト含む)425名、加盟なしが339名であった。

4. 調査結果

「メタ認知」と「人間関係」と「前期成績」と「入学後生活満足度」の項目得点を合計して平均値から各要因の得点を算出した。それぞれの平均値 (M) と標準偏差 (SD) は、表 1 に示した。各要因得点それぞれについて、性別・入学形態・課外活動形態ごとの差を検討するために t 検定を行ったところ、以下のような結果が得られた。有意な差が検出された項目は、男女間では、「メタ認知」において女性の方が高く (メタ認知: $t(889)=3.09, p<0.01$ 、「前期成績満足度」「大学生生活満足度」においては男性が上位であった (前期成績満足度: $t(928)=4.46, p<0.01$; 大学生生活満足度: $t(902)=2.16, p<0.05$)。所属団体の体育会と一般サークル間では、「人間関係」においては体育会が上位であったが、「メタ認知」においてはサークル加盟者が上位であった (メタ認知: $t(521)=3.71, p<0.01$; 人間関係: $t(540)=2.97, p<0.01$)。一般サークルと「加盟なし」間では、サークル加盟者の方が「大学生生活満足度」が上位であった「大学生生活満足度」($t(802)=2.29, p<0.05$)。尚、入試形態では、推薦入試者と一般入試者との間の「前期成績満足度」でのみ有意差が検出された (前期成績満足度: $t(607)=1.696, p<0.1$)。尚、付属生の場合いずれの項目においても、推薦入試者と一般入試者との間で有意な差は検出されなかった。

表 1 性別・入試形態・所属団体ごとの各要因の平均値と標準偏差 (記述統計)

	女性		男性		推薦入試		一般入試	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
メタ認知力	4.61**	0.97	4.41	0.95	4.57	0.90	4.47	0.91
人間関係指数	5.17	1.13	5.07	0.92	5.13	0.96	5.09	0.99
学習動機	4.9	0.94	5.04	0.85	5.03	0.78	4.94	0.88
前期成績満足度	3.31	1.17	3.62**	0.98	3.40	1.09	3.55**	1.07
大学生生活満足度	3.45	0.98	3.58*	0.79	3.55	0.85	3.51	0.88
	体育会		サークル		加入無		サークル	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
メタ認知力	4.88**	0.95	4.41	1.03	4.54	0.08	4.41	1.03
人間関係指数	5.43**	1.14	5.05	1.08	5.15	0.91	5.05	1.08
学習動機	5.16	0.80	4.94	0.92	5.02	0.89	4.94	0.92
前期成績満足度	3.32	1.20	3.51	1.08	3.44	1.07	3.51	1.08
大学生生活満足度	3.52	0.816	3.58	0.90	3.43	0.88	3.58*	0.90
	全体							
	M	SD						
メタ認知力	4.51	0.92						
人間関係指数	5.13	1.03						
学習動機	5.00	0.90						
前期成績満足度	3.46	0.09						
大学生生活満足度	3.53	0.897						

* $p<.05$, ** $p<.01$

次に、メタ認知力や入学後の人間関係の状態 (友人や教員、周囲の人と有効な関係構築) が、「前期成績満足度」や「大学生生活満足度」とどのような関係にあるかについて相関分析を行った (表 2)。男女間に分けて層別相関分析を行うと、男女ともに、「大学生生活満足度」には、他

のすべての要因が正の相関で有意に関連していた。異なる点は、女性においては、「前期成績満足度」に「メタ認知力」が有意に関連している一方で、男性では「メタ認知力」とは相関関係が検出されなかった。「人間関係指数」とは男女ともに「前期成績満足度」では有意性は検出されなかった。「学習動機」の高低は「前期成績満足度」には男女ともに相関がみられなかったが、「生活満足度」には共に相関が見られた。

表2 各尺度間の相関

(女性)

	前期成績満足度	学習動機	人間関係指数	メタ認知
前期成績満足度	1	.064	.022	.123**
大学生生活満足度	.325**	.199**	.209**	.227**

* $p < .05$, ** $p < .01$, N=829

(男性)

	前期成績満足度	学習動機	人間関係指数	メタ認知
前期成績満足度	1	.00	.078	.046
大学生生活満足度	.291**	.149**	.151**	.198**

* $p < .05$, ** $p < .01$, N=829

次に、「学習動機」の下位要因と「前期成績満足度」「生活満足度」との相関を測定した。学習動機は因子分析の結果、4つの下位因子に明確に分けることができた(表3)。(1)他者からの承認や尊敬のため「他者承認」、(2)学ぶこと自体の楽しさを味うため「自体喜び」、(3)経済的利益を得るため「経済利益」、(4)将来何かの役に立てるため「将来役立」、の4項目である。各下位因子の α 係数は、各.92、.89、.90、.84。因子ごとに各実験参加者の評定平均値を算出し、これを各実験参加者の得点とした。表4は各下位因子間の相関を示す。

表3 学習動機の因子分析結果(主因子法 Promax 回転後)

	因子			
	1	2	3	4
F1 他者承認・尊敬 (M=4.1 SD=1.3 α=.92)				
Q2.13 周りと一緒に安心	.852	.246	.441	.137
Q2.15 勉強、尊敬される	.848	.236	.559	.145
Q2.17 成績で褒めてもらえる	.809	.286	.433	.139
Q2.14 成績、優劣意識	.799	.294	.449	.153

Q2.12 親友人に認められたい	.775	.301	.372	.209
Q2.16 人並み自信	.767	.286	.568	.208
Q2.11 関係志向みんながやっている	.699	.168	.431	.147
F2 自体関心・喜び (M=5.1 SD=.94 α=.89)				
Q2.4 わかることの喜び	.186	.802	.152	.397
Q2.3 勉強自体が面白い	.261	.759	.108	.320
Q2.1 新しいことを学びたい	.090	.715	.176	.456
Q2.2 知識を身に着けた人	.133	.710	.271	.516
Q2.10 知識技能を使う喜び	.407	.702	.241	.444
Q2.5 勉強は頭の訓練	.500	.693	.391	.327
Q2.7 多角的な思考	.163	.675	.279	.431
Q2.6 合理・論理に必要	.342	.673	.354	.345
F3 将来の経済的利益 (M=5.1 SD=1.3 α=.90)				
Q2.20 良い仕事を得るため	.519	.256	.881	.373
Q2.19 社会で優遇されるため	.549	.313	.875	.366
Q2.18 経済的な目標	.481	.310	.836	.430
F4 将来役立 (M=5.6 SD=1.16 α=.84)				
Q2.8 将来に活かしたい	.181	.502	.407	.858
Q2.9 いずれ役に立つ	.274	.534	.423	.838

表4 学習動機下位尺度間の相関

因子	他者承認	自体喜び	将来経済利益	将来役立
他者承認	1	.332**	.567**	.241**
自体喜び	.332**	1	.326**	.538**
経済利益	.567**	.326**	1	.437**
将来役立	.241**	.538**	.437**	1

†<.10, * $p < .05$, ** $p < .01$, N=829

表5および表6は、4因子に分けることができた各「学習動機」と「前期成績満足度」「大学生活満足度」との相関をみた結果である。「前期成績満足度」については、女性で「勉強自体が関心・喜び」のみ小さな相関が有意に確認された。男性についてはいずれの項目にも正の相関

は確認されなかった(表5)。「大学生生活満足度」については、男女ともに「勉強自体が関心・喜び」「将来に役に立つ」において小さな相関が有意に確認された(表6)。男女ともに「将来の経済的利益のため」とする学習動機とは相関が有意に確認できなかった。

表7は、各「学習動機」と「メタ認知力」「大学内人間関係力」との相関である。すべての項目で有意であったが、相対的に大きな相関がみられたのは、「メタ認知力」と「各学習動機」との間である。この時点では「メタ認知力」と「大学内人間関係力」との間には小さな相関しか確認できなかった。

表5 性別の「前期成績満足度」と学習動機(4下位因子)との相関

【女性】

	他者承認	自体喜び	将来経済的利益	将来役立
前期成績満足度	.046	.129**	.0001	.095*

†<.10, * p <.05, ** p <.01, N=411

【男性】

	他者承認	自体喜び	将来経済的利益	将来役立
前期成績満足度	.007	.074	-.047	-.002*

†<.10, * p <.05, ** p <.01, N=418

表6 性別の「大学生生活満足度」と学習動機(4下位因子)との相関

【女性】

	他者承認	自体喜び	将来経済的利益	将来役立
大学生生活満足度	.080	.257**	.064	.231**

†<.10, * p <.05, ** p <.01, N=411

【男性】

	他者承認	自体喜び	将来経済的利益	将来役立
大学生生活満足度	0.036	.248**	.045	.168**

†<.10, * p <.05, ** p <.01, N=418

表7 「メタ認知力」「大学内人間関係力」と学習動機(4下位因子)との相関

	メタ認知	大学内人間関係力
(学習動機) 他者からの敬意や承認	.326**	.190**
(学習動機) 自体が関心や喜び	.483**	.245**
(学習動機) 将来の経済的利益になる	.278**	.161**

(学習動機) 将来どこかで役に立つ	.364**	.238**
メタ認知力	1	.240**
大学内人間関係力	.240**	1

* $p < .05$, ** $p < .01$, N=829

次に、第1学年9月末時点での「大学生生活満足度」を従属変数、「人間関係」「メタ認知」「前期成績満足度」「学習動機」の各要因を独立変数とした重回帰分析を性別・入試形態・課外活動種類有無・バイト歴ごとに行なった(表8)。男女ともに「人間関係指数の良好さ」と「前期成績満足度」が強い規定要因になっていることがわかる。学習動機では、男性は「学ぶこと自体の喜び・楽しさ」が、女性では「将来への蓄えやスキル」のためと考える人の生活満足度が高くなっている。また、「メタ認知力」の高さでは、男性だけが「生活満足度」に影響を与えていることも特徴である。

「入試形態」での違いでは、影響を与えているラベルにかなりの違いが見られた。付属生では「人間関係の良好さ」と「前期成績満足度」が、推薦入学生では「学習動機」の「学ぶこと自体の喜び・楽しさ」が、一般入試生では「メタ認知力」と「前期成績満足度」が強い影響を与えていることが示され、志向性の違いがはっきりしていることがわかる。「課外活動の種類および有無」では、体育会所属学生は「人間関係の良好さ」と「前期成績満足度」が、「一般サークル加入者」では「メタ認知力」「人間関係の良好さ」「前期成績満足度」が「大学成績満足度」にかなり強い影響を与えている。また、「サークル加盟なし者」では「人間関係の良好さ」「前期成績満足度」が強い規定要因となっている。学習動機に関して言えば、「一般サークル加入者」では「将来のために」、「加入なし」では「それ自体の喜びや楽しみ」が有意確率5%で影響を与えていることが特徴である。

「アルバイト経験」では、「6か月以上1年未満」の人では「人間関係の良好さ」が、「経験なし」の人では「人間関係の良好さ」と「前期成績満足度」が強い規定要因となっており、学習動機面の「自体が喜び・関心」も高い関係性があることが示された。「学習動機」は4つの下位因子項目ごとに回帰係数を求めたが、この時点で、有意差(5%)で確認できたのは、「学習自体が関心・喜び」「将来何らかの形で役に立つ」の2項目だけで、「他者からの承認」「経済的利益」はいずれの属性分類において「大学生生活満足度」に影響を与えていなかった。

表8-1 各ラベル(7件法:成績満足度のみ5件)を独立変数とする重回帰分析の結果
標準偏回帰係数(B):第1学年9月末時点での大学生生活満足度

【性別、入試種別】

	(男性)	(女性)	(付属生)	(推薦)	(一般入試)
メタ認知力	.11*	.02	.15*	-.17	.26***
人間関係指数	.21***	.27***	.29***	.23 ⁺	.04
前期成績満足度	.26***	.23***	.24**	.17 ⁺	.21***

(学習動機)						
他者承認		-.06	-.49	.00	-.27	-.09
喜び・楽しさ		.14*	.08	.08	.31*	.06
経済的利益		-.02	-.04	-.07	-.19	-.01
将来役立		.06	.11*	.08	.13	.05
R²		.22	.21	.30	.23	.14
ADJ R²		.20***	.19***	.28***	.17**	.15***

†<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

表 8-2 各ラベル (7 件法 : 成績満足度のみ 5 件) を独立変数とする重回帰分析の結果
標準偏回帰係数 (β) : 第 1 学年 9 月末時点での大学生生活満足度

【課外活動歴、バイト歴別】

	課外活動歴			バイト歴	
	(体育会)	一般サーク	加盟なし)	(6 か月以上 1 年未満)	経験なし)
メタ認知力	-.15	.15**	-.03	.00	-.04
人間関係指数	.25*	.17***	.32***	.26**	.19**
前期成績満足度	.38**	.19***	.31***	.18	.26***
(学習動機)					
他者承認	.19	-.06	-.09	.00	-.02
喜び・楽しさ	-.09	.09	.14*	.19 ⁺	.22**
経済的利益	.05	-.01	-.04	-.16	-.11
将来役立	-.05	.14*	.05	.07	.00
R²	.26	.20	.25	.21	.21
Adj R²	.19**	.19***	.24***	.17***	.18***

†<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

5. 総合考察

本調査では、複数の視点から大学入学後半年時点での生活満足度の要因を検討してきたが、初年次のこの時点で「生活満足度」と相関が高いと考えられる要因は「人間関係」と「前期成績満足度」であることがわかる。「自己効力感」につながるとされる「メタ認知力」の高低は、「男性」「付属生」「一般入試生」「サークル加盟者」以外ではさほど大きな要因とはなっていない。入学後半年のこの時点では、「メタ認知力」項目以上に、居場所となる「人間関係」の良好さと「成績評価」につながる個々への適切な勉強方法指導とが、大学生生活満足度を高める上で重要なポイントであることが示された。ただし、「男子学生」「一般入試生」「サークル加盟者」においてはこの時点においては、「メタ認知力」の高低が、生活満足度に有意に影響を与えていることをみると、メタ認知力と相関が高いとされる自己効力感を感じる機会をこまめに設けることが重要になろう。また、女子学生に対しては、「学習内容と将来との関係」についての理解が生活満足度を高める可能性があることからキャリア教育に関する十分な情報提供が大切になろう。

入試形態による比較分析では、全体の 39.7% (329 人) にあたる「一般入試者」で、「メタ認知力」の方が「人間関係」よりも、有意に生活満足度と相関が高いことがわかる。同じ傾向性は課外活動での「一般サークル」加入グループ (51.3%、425 人) にもみられ、人間関係と同時に、「メタ認知力」の高低が生活満足度と相関をもっている。このことは、付属生や体育会生と比べ、キャンパス周辺での人間関係がまだ希薄な分、自己を客観視できるメタ認知力が、人間関係満足度の不足分をカバーしている、という見方もできよう。これらの学生の多くは、学内での新たな人間関係構築や異なる環境への適応が必要になり、自からの考えで行動、判断する必要が高いことが予測でき、「メタ認知」との相関に繋がった可能性もある。これに対し、体育会生は、部活内での人間関係、居場所が構築されやすく、また、目標やグループ活動のスケジュールがしっかりしていることからメタ認知による影響よりも、前期成績満足度が生活満足度に大きな影響を与えていた。

6. 今後の課題

今回の調査では、1 年次 9 月末期だけの「大学生生活満足度」と各要因との関連を調べた。先行研究では、大学入学後に 6 か月ごと計 3 回同じ大学生 (315 名→87 名→63 名) の生活満足度を追うことで、周囲の友人からのサポート、特に異性友人からのサポートの高さが、各調査時点においても、持続的な大学生生活満足度の維持に重要であったとの報告もある(吉武、2011)。今後は、卒業に至るまでの継続的で時系列的な調査が必要であろう。また、今回の調査項目では尺度設定していない「パーソナリティ面での楽観性」(Ben-Zur,2003)や、最近 3 か月内の「何らかのイベントでのポジティブな達成観」が継続的な「学生生活満足度」維持には重要な要因であること(吉武、2010)、社会貢献活動などの「ソーシャルサポート」活動への参加が社会的スキルや他者とのつながり意識を高め「大学生の生活満足度」に強く関連する(吉武、2011)などの研究成果も示されている。今後の調査ではこのような項目設定も必要とされよう。

選挙権 18 歳制度化に伴い、今後は大学生の社会貢献や公共性への関心強化が一つの課題となると考えられるが、浅野 (2011) は、大学生の公共性や政治・社会参加に関わる重要な規定要因として「所属集団の多元性」「仲の良い友人数」「大学生生活満足度」を挙げている。今回の本調査では、1 年生対象であったこともあり、一般的他者を想定した良好な人間関係の形成(「人間関係」質問項目⑤～⑧)に配慮している対象者の数は、大学内仲間・友人へのそれ(質問項目①～④)と比べて、かなり低い数値となって表れている ($t(826)=15.022, p<0.01$)。大学内人間関係指数 ($M=5.527, SD=1.0428$)。大学・学生外他者との人間関係指数 ($M=4.913, SD=1.064$)。($r=.313, p<0.01$)。大学生の生活満足度を維持しながら主体的な社会貢献意識を芽生えさせるためには、「良好な学生仲間との関係」に加え、一般社会や地域社会での多元的人間関係にも目を向けさせるカリキュラム上の施策が必要になろう。また、「メタ認知力」が、学習への時間配分や計画調整することで自律的学習の効果を高める要因であるとの先行研究も示されていることから(中西、2015)、自己内での対話を可視化する演習型での学習機会も模索されよう。さらに、「メタ認知力」に含まれる要素は、非常に広く、全体を概観する形では、特

定の満足度との関係についてもあいまいな結果になってしまいやすい。このことから、より成績満足度や人間関係との関係が強いと思われる部分に特化した尺度等を用いる必要がある。尚、今回は男女別と入学経路ごとに、メタ認知力→学習動機（4下位項目）・大学内人間関係→「前期成績満足」・「大学生生活満足度」の流れを仮定したパス解析を行ったが、十分な適合度がいずれのケース分析では得られなかった。「大学生生活満足度」の測定についても日本版主観的幸福度尺度や精神的安定尺度なども開発されており、他の変数との構造設定の在り方も含めて次回調査への課題としたい。

参考文献【邦文】

- ・ 浅野智彦 (2011)『若者気分 趣味縁から始まる社会参加』岩波新書、110-114.
- ・ 市川伸一 (1995)『学習と教育の心理学』岩波書店、18-23.
- ・ 下鳥裕美 (2014)「メタ認知を促す医学教育」杏林医学誌、46 卷 1 号、3-10.
- ・ 外山美樹・松井茂男 (1999)『大学生における日常的出来事と健康状態の関係』教育心理学研究、47、374-382.
- ・ 高倉実ほか (2012)「青少年の学校や近隣におけるソーシャル・キャピタル尺度の作成」日本健康教育学会誌、20 号、139.
- ・ 露口健司 (2016)『ソーシャル・キャピタルと教育』ミネルバ書房、28.
- ・ 中西満悠ほか(2015)『大学生を対象とした日本語版学業的遅滞尺度の開発』パーソナリティ研究、23 卷、3 号、197-200.
- ・ 西村多久磨 (2011)「自律的な学習動機づけとメタ認知的方策が学業成績を予測するプロセス」教育心理学研究、59、77-87.
- ・ 芳賀道匡ほか (2017)「大学生活における主観的ソーシャル・キャピタル尺度の開発」教育心理学研究、65、77-90.
- ・ 平山祐一郎、平谷祥子 (2001)「大学生における学習動機の 2 要因モデルの検討」東京家政大学紀要 41 (1)、101-105.
- ・ 藤田正 (2010)「メタ認知的方略と学習課題先延ばし行動の関係」奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要、19、81-86.
- ・ 三宮真知子 (1996)『思考におけるメタ認知と注意—認知心理学 4[思考]』市川伸一編、東京大学出版会、157-180.
- ・ 三宮真知子 (2004)「思考・感情を表現する力を育てるコミュニケーション教育の提案：メタ認知の視点から」鳴門教育大学学校教育実践センター紀要 19、151-161.
- ・ 三宮真知子 (2008)『メタ認知—学習力を支える高次認知機能』北大路出版、71-72.
- ・ 吉武尚美 (2010)『中学生の生活満足度に関連するポジティブ・イベント』教育心理学研究、58、140-150.
- ・ 吉武尚美 (2011)『大学生の生活満足度の時間的変化と楽観性・ソーシャルサポート、ライフイベントの関連—ライフスタイルと社会経済的要因を統制して』お茶の水女子大学

ローバル COE プログラム Proceedings、16、80-98.

- 吉野 巖ほか (2008) 「成人を対象とするメタ認知尺度の開発」北海道教育大学紀要教育科学編、59 (1)、265-274.

参考文献【邦文】

- Ben-Zur, H.(2003). Happy adolescents: The link between subjective well-being, internal resources, and parental factors. *Journal of Youth and Adolescence*,32,67-79.
- Burton, K. D., Lydon, J. E., D'Alessandro, D. U., & Koestner, R. (2006). The differential effects of intrinsic and identified motivation on well-being and performance: Prospective, experimental, and implicit approaches to self-determination theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91(4),750-762.
- Ellis, D. & Zimmerman, B. (2001). Enhancing self-monitoring during self-regulated learning of speech. In H. J. Hartman (Ed.). *Metacognition in Learning and Instruction*. Dordrecht : Kluwer Academic Publishers,205-228.
- Gourgey, A. (2001) Metacognition in basic skills instruction. In H. J. Hartman (Ed.). *Metacognition in Learning and Instruction*, 17-32. Kluwer Academic Publishers.
- Greenspoon,P.J., & Saklofske,D.H.(2001). Toward an Integration of Subjective Well-Being and Psychopathology. *Social Indicators Research*, 54(1), 81-108.
- Koestner,R. & Losier, G. F. (2002). Distinguishing three ways of being highly motivated: A closer look at introjection, identification, and intrinsic motivation. In E. L. Deci & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY, US: University of Rochester Press,101-121.
- Putnam.R.D.(2000).Bowling alone: The collapse and revival of American community. New York: Simon and Schuster. (パットナム.R.D 柴内康文訳 (2006) 『孤独なボーリング』 柏書房)